

ポルトガル語文法をめぐる諸問題 (3)  
「ヨハネ福音書」2章9 - 11節 ポルトガル語訳諸版と  
スペイン語・ギリシア語・ラテン語各版との  
文法的異同に関するいくつかの所見

水 戸 博 之

キーワード：ポルトガル語、比較文法、スペイン語、ギリシア語、ラテン語、ギリシア語、聖書

第2章第9 - 11節では、カナでの婚礼における「最初の徴」の後半部が語られる。節番号の後に、中心となる文法項目を見出しとして掲げる。

**第9節 時の副詞節、間接疑問文の時制、変化を示す補語、古典語の完了分詞と葡西訳**

(2,9)

1) Este provou a água transformada em vinho, sem saber de onde vinha. Os que serviam estavam sabendo, pois foram eles que tiraram a água. Então o mestre-sala chamou o noivo

2) O chefe de mesa provou a água transformada em vinho. Não sabia o que tinha acontecido, pois só os criados é que estavam ao corrente do facto. Mandou então chamar o noivo

3) Tendo o mestre-sala provado a água transformada em vinho (não sabendo donde viera, se bem que o sabiam os serventes que haviam tirado a água), chamou o noivo

(L.H.) Então o dirigente da festa provou a água, e ela havia virado vinho. Ele não sabia de onde tinha vindo, mas os empregados sabiam. Por isso chamou o noivo

4) ~~Ut autem gustavit architriclinus aquam vinum factam, et non sciebat unde esset, ministri autem sciebant, qui haurierant aquam, vocat sponsum architriclinus,~~

Ut autem gustavit architriclinus aquam vinum factam, et non sciebat unde esset, ministri autem sciebant, qui haurierant aquam, vocat sponsum architriclinus,

Mas cuando gustó el maestresala el agua hecha vino — y no sabía de dónde era, pero sabíanlo los que servían, que habían sacado el agua —, llama al esposo el maestresala

5) Este probó el agua convertida en vino sin saber de dónde venía (los sirvientes sí lo sabían,



y no sabía de dónde era, 未完了過去 / ser 未完了過去

5) sin saber de dónde venía (不定詞句) venir 未完了過去

1)と5)は逐語的に対応する。2)のみが疑問詞がo que「何が」で疑問文の主語であり、動詞もacontecer(起きる・生じる)である。原典をはじめその他の訳は「どこから」という起点を尋ねる疑問詞である。動詞について、4)  $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$ , esse, ser / 近代語各版 vir, venir という対照が生じているのは興味深いところである。ポルトガル語の2)3) (L.H.)は過去完了あるいは大過去を用い、時制の差違を明確にしようとしている。

変化を示す補語。ここでは「ぶどう酒に変わった水」の「ぶどう酒」がいかに表現されているか文法的に考察してみよう。

1)2)3) a água transformada em vinho

(L.H.) e ela havia virado vinho.

4)  $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$   $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$   
aquam vinum factam,  
el agua hecha vino

5) el agua convertida en vino

1)2)3)5)において「ぶどう酒」は、変化の状態や結果を示す前置詞em; enに導かれている。「水」に続く(過去)分詞は当然のことながら先行する語に性数一致している(女性単数形)。元の動詞transformar; convertir「変容する・変換する」は通常、他動詞として用いられる。(L.H.)は文を構成している。他動詞にも自動詞にも用いられるvirar「...になる、...に変る」が過去完了形をとるが、vinhoは前置詞に導かれず、主語ela(水)と言わば同位格の関係である。4)において興味深いのは、古典語とスペイン語逐語訳の語順である。古典語においては分詞は最後にあるのに対し、スペイン語訳ではvinoが最後である。分詞は、ギリシア語原典ではこの場合「水」と「ぶどう酒」とも中性名詞であるため明確でないが、「水」と性数格においていずれも一致していると考えられる。変化の結果である「ぶどう酒」には、いずれの言語も定冠詞等の限定辞を伴っていない。スペイン語のel aguaのelはeufonía(好音調)のためである。なお、 $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  の目的語である $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  は古典においては多くの場合属格をとる。<sup>3</sup>

ギリシア原典には完了分詞が2つ用いられている。<sup>4</sup>一つは上述の $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  ( $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  「...になる」の完了分詞中受動相中性対格)であるが、完了形を用いることで、すでにぶどう酒への変化を終えてしまっていたものを世話役が味見をしたことが明らかになる。もし仮に現在分詞 $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$ であったとしたら、口に含んで水が酒に変化するのを体験したということも考えられるであろう。

もう一つは、 $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  の  $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  (  $\epsilon\sigma\sigma\epsilon$  )



Todos 1 )3 (L.H.) 代名詞的用法・複数形

É costume ... servir (不定文) ... 2 ) 特定の動作主は明示されていない。「(不定文する) ならわし・習慣である。」

☞ ~ ” , omnis homo, Todo hombre 4 ) 形容詞的用法・定冠詞を伴わない単数形  
 Todo el mundo 5 ) 形容詞的用法・単数形 + 定冠詞 + 名詞

2 ) は動作主のない一種の無人称的表現と考えられるのでここでは除外する。何らかの全称を表す不定語の形態について次のように整理することができよう。すなわち、代名詞的用法か形容詞形容詞的用法か；単数か複数か；後続の名詞に冠詞を伴うか否か。

ポルトガル語 1 )3 (L.H.) 版においては todos と代名詞である。後述の文法書およびいくつかの辞書では、不定語の項目あるいは不定形容詞の見出しの後に表れ、代名詞的用法の扱いは必ずしも詳細ではないようである。その一方で、*Novo Aurélio Século XXI* 3.ed. が、todo の項目とは別個に todos の項目を立てているのが注目される。<sup>5</sup> Todos の記述は “ todas as pessoas; toda a gente; todo o mundo; o mundo inteiro; deus e o mundo (神と世界：森羅万象?) ” である。

聖書本文 1 )3 (L.H.) ポルトガル語版では、ギリシア語原典が ☞ ~ ” (形容詞 + 名詞) であるにもかかわらず、todos 単独で主語となっている。同形のスペイン語と比較しポルトガル語における todos は単なる不定代名詞以上の独立性を帯びて用いられることが多いのであろうか。代名詞あるいは名詞的用法について葡 - 西辞典の記述は次のとおりである。“ s.m. conjunto, universalidad; todo; pl. todos, todas las personas. ”<sup>6</sup>

ポルトガル語文法において todo に関する見解は、新旧変化があり現在においても必ずしも統一はされていないようである。<sup>7</sup> Napoleão Mendes de Almeida, *Gramática Metódica da Língua Portuguesa 39.a ed.* によると、古い著作家において不定語 todo の後には、単数であれ複数であれ定冠詞を省く (suprimir) のが規則であったとされる。一方、同著者によれば、今日一部の作家や教師が次のように説明しているのは根拠がないとしている。

\* “ *todo homem* ” (= *cada homem, todos os homens*) / *todo o homem* (= *homem inteiro*)  
 このような分類はスペイン文法の影響であろうか。<sup>8</sup> Almeida の次の用例がスペイン語との相違を示すものである。

Eu trabalho *todo* o dia 「私は毎日働いている。」 (= *cada dia, todos os dias*)

esp. Yo trabajo todos los días (cada día).

/ o dia *todo* 「(その日)丸一日中」 (= o dia *inteiro*)

esp. todo el día (= el día entero?)



2)	o vinho melhor	名 + 比	o pior	比	o melhor	比
3)	o bom vinho	形 + 名	o inferior	(比?)	o bom vinho	形 + 名
(L.H.)	o vinho bom	名 + 形	o vinho barato	名 + 形	o melhor vinho	比 + 名
4)	bonum vinum	形 + 名	id quod deterius est	比	bonum vinum	形 + 名
	el buen vino	形 + 名	el peor	比	el vino bueno	名 + 形
5)	el vino bueno	形 + 名	el peor	比	el bueno	形
6)	良いぶどう酒		劣ったもの		良いぶどう酒	

原典であるギリシア語は、冠詞 + 形容詞 + 名詞の語順が2個所の「良いぶどう酒」に相当する部分に使われている。ギリシア語において冠詞 + 名詞 + 形容詞の語順であると、形容詞が述語的補語として受取られ「ぶどう酒は良い」の意味になる可能性があるためか語順に変化はない。 $\alpha\upsilon\tau\omicron\varsigma$  は第一義が「美しい」。さらに、ぶどう酒などに「良い、良質の」を意味する。 $\chi\upsilon\upsilon\sigma$  「劣ったもの」にあたる部分は、もともと  $\mu\iota\kappa\rho\upsilon$  「小さい」の比較級である。

ラテン語においてまず注意を引くのは、二番目の比較級に対応する部分が関係文になっていることである。deterius n. (deterior m.,f.) は、原級が存在しない。ラテン語においては、vinum が中性であるため、副詞用法との混同を避けるため関係文にしたのであろうか。ラテン語の形容詞と名詞の語順については、語順自体がかなり自由ということから、文法書によって記述に変化が見られる。いくつかの文法書は一般的な語順を「名詞 + 形容詞」としている。<sup>13</sup> この bonum vinum のように、修飾語として用いられる場合はふつう前におかれるとされる。<sup>14</sup>

4) のスペイン語訳が「直訳的」であるにもかかわらず、el buen vino / el vino bueno と語順を入替えているのは興味深い。ポルトガル語とスペイン語の形容詞は一般に、名詞の後に置かれが、bom, bueno, grande, malo などの品質形容詞は前置されることのほうがむしろ多く、さらに前後の位置によってしばしば意味に変化が見られる。<sup>15</sup> 品質形容詞の語順と機能の関係は、制限用法(名詞の後)と非制限用法(一般に名詞の前)に分類することができる。品質形容詞の制限用法とは、形容詞が名詞の指示する対象の幅を狭め限定することであり、非制限用法とは、対象である名詞の属性を記述することである。<sup>16</sup> 以上の事柄を4)のスペイン語訳に当てはめると次のようになる。el buen vino (一般に良質のぶどう酒); el peor (良いぶどう酒に比べて品質の劣る酒。定冠詞 + 比較級であるが、最上級の意味ではなく比較級の形容詞を冠詞を付して名詞化したものと考えべきであろう); el vino bueno (劣った酒とは品質の点で「良い」と識別される酒)。

この箇所では、むしろ古典語が構文的に語順が制約されている観があるのに対し、ポルトガル語各版間の異同と多様さは興味深い。1)と3)の例からは、形容詞と名詞の語順により意味の変化を反映させようという訳者の意図は見出されない。3)で注意すべきことは、o inferior について、語源すなわちラテン語においてはinferus「下方の、後ろの」の比較級であるが、ポルトガル語においては比較級の意味を失い、原級の意味で用いられている点である。<sup>17</sup>この点、(L.H.)も比較級形ではなく、barato「安価な」という他の単語を使用している。(L.H.)o melhor vinho は最上級の意味と考えるべきであろうか。2)は3個所いずれにも比較級形が表れる。

時間関係を示す文「酔いがまわったところに劣ったものをだすものですが」以下の各版の表現にもかなりの差違が見られる。構文上の性質を明らかにするために各版の時制と法の繋がりを整理してみよう。

斜体部はギリシア語原典に直接表れない部分。

- 1) quando *os convidados* estão bêbados, *servem* o pior. .... guardou....  
 時の接続詞(同時的) + 直説法現在 3 複(状態), 主文: 直説法現在 3 複 . . . . .  
 . . . . . 直説法完全過去
- 2) e só depois de *os convidados* terem bebido bem é **que** *se serve* o pior. .... tu guardaste  
 前時の前置詞句(主語明示・完了形人称不定詞 3 複)+ 強調構文 é que(直説法現在:  
 再帰受身 3 単). . . 直説法完全過去
- 3) quando já beberam *fartamente*, *servem* o inferior; .....tu .... guardaste  
 時の接続詞(直前) + já 直説法完全過去 3 複, 主文: 直説法現在 3 複; . . . . .  
 . . . 直説法完全過去
- (L.H.) depois que *os convidados* beberam à *vontade*, *servem* o vinho barato. .... guardou  
 前時の接続詞 + 直説法完全過去 3 複, 主文: 直説法現在 3 複 . . . 直説法完全過去
- 4) ὡς ἔπειτα ἵνα ἴδωμεν ἅμα ἅπαντες ἅμα ἅπαντες ἅμα ἅπαντες  
 時の接続詞 + 接続法アオリスト受動態 3 複, 時の副詞 + 目的語 . . 直説法現在完了  
 et cum inebriati fuerint, id quod deterius est. .... servasti .....
- 時の接続詞 + 接続法完了 3 複, 時の副詞 + 目的語 . . . . . 直説法完了
- y cuando están ya bebidos, *pone* el peor; ..... has reservado  
 時の接続詞(同時的) + ya 直説法現在 3 複(状態), 主文: 直説法現在 3 単; . . . . .  
 . . . 直説法現在完了 2 単
- 5) y cuando *la gente* está bebida, el peor; .....te has guardado

時の接続詞(同時的) + 直説法現在3単(状態), 目的語; ...  
 ... 直説法現在完了2単(再帰動詞)

ギリシア語原典では3人称複数で示されている動詞の主語の対応で、ポルトガル語各版は2)の補足された再帰受身を除いて、すべて3人称複数で対応している。主語の数についてスペイン語訳において異同が見られる。4)がここもまた「直訳」であるにもかかわらず、時の副詞節で3人称複数、補足部分が3人称単数と差違を設けている。前者は無人称的な一般人称、後者はTodo hombreに一致しているのであろうか。5) la gente「人々」は複数の意味であるが、ふつう動詞は単数で一致させる。

時の接続詞句の訳がポルトガル語一言語間においても各版異なる。  
 ポルトガル語とスペイン語各版の時制のつながりを用法の組み合わせによって再度整理すると次のようになる。

「酔いがまわったところに劣ったものをだすものですが、」の箇所：

現在時制 1)4)5) / 完全過去または完了不定詞 2)3) (L.H.)

同時・直前の接続詞 1)3) (L.H.)4)5) / 前時の接続詞・前置詞句 2) (L.H.)

「今まで取って置かれました。」の箇所：

完全過去 1)2)3) (L.H.) / 現在完了 4)5)

後半部ポルトガル語各版は、スペイン語訳が現在完了であるのに対し、すべて副詞句 até agora「今まで」を伴いながら完全過去時制をとっている。一方、前半の部分においてポルトガル語版は各版異なる多様さであるが、それは古典語原典に起因するものだろうか。

ギリシア語原典の問題は、ο'ε「その時」以下主文であるはずの箇所が、対格の目的語「劣ったものを」のみ示され、動詞が表れていないことである。各近代語版は主語の数に異同はあるものの τ'ϕ が省略されていると考え、それを補って訳出している。また、文献批判上の問題として ο'ε (対応するラテン語は tunc) を削除しているテキストが主流のようである。本論で使用の Nuevo Testamento Trilingüe, Madrid, 1987 では、ο'ε を残す一方で、同ヴルガタ訳では tunc を除いている。<sup>18</sup> なお一般に ο'ε, tunc は過去に言及し、それぞれ v ~v, nunc「今」に対応するとされる。

時の副詞節において接続法を使用しているのは古典語のみである。ὅτε は < ὅε + ὅν 2語が結びついてできたものである。スペイン語の文法書では、図式的分類であるが、ὅε / cuando; ὅτε / siempre que に対応するとしている。<sup>19</sup> スペイン語の siempre que「...」

する時はいつも」は、仮定的なとき接続法(ふつう主文は未来または命令)を、事実であるとき直説法をとる。<sup>20</sup> *ŏ*に導かれる時間関係を表す副詞節は、接続法を用い現在や未来において繰返される習慣的な出来事を述べる、さらにアオリスト時制をとることによって主文に対して先時性を示すことができる。<sup>21</sup>

ラテン語の対応箇所 *et cum inebriati fuerint* には、*ŏ* の用法を近代語と比較検討した後、ある種の戸惑いを覚える。なぜなら、ポルトガル語訳・スペイン語訳との対応では *fuerint* は *esse* の接続法完了と考える方が無理のない理解と思われるが、後述のように先立未来(未来完了)の変化形も見かけ上まったく同形で可能性を全く否定しきれないからである。それゆえ、この箇所は接続詞 *cum* のいかなる用法なのか検討してみよう。<sup>22</sup> *cum* には基本的に2つの用法があると考えられる。

1. 直説法とともに純粹に時間的關係を表す。
2. 接続法とともに時間と関連して原因・理由や譲歩を表す。<sup>23</sup>

近代語訳から逆に溯って考えれば、時間的關係であるから直説法 *cum inebriati sunt* (*fuerunt*) でよいはずである。なお、ギリシア語原典では単独形で受動態3人称複数をしめしているが、ここでは *inebriati* (形容詞: 男性複数主格形) + *esse* の変化形と考える。すなわち複合形ではなく、*esse* の語形自体が時制と法を示すということである。<sup>24</sup> *fuerint* が接続法完了形として、なぜ接続法なのか理由はいくつか考えられる。1) 時間的關係とともにやはり原因・理由を含意している。2) ギリシア語原典の影響。3) 古典ラテン語に比べ直説法と接続法の用法の区別が明確でなくなった。<sup>25</sup>

もし仮に主文の動詞が省略されておらず未来形: *ponet, ponetur* (受動形) や命令形: *pone, ponite* であつたら、*cum* の節は先立未来として理解することも可能であろう。*cum* + 先立未来の例として、ツルデル『ラテン文法』は「ルカによる福音書」17章10節の一部を引用している。各版の用例を列挙し詳細を明らかにすることによって「ヨハネによる福音書」の当該箇所との相違を考察してみよう。

引用例は文法の教科書用に手が増えられているようである。<sup>26</sup> *Trilingüe* 版では *omnia mandata* は関係文、*dicetis* (未来2人称複数形) は *dicite* (命令法2人称複数形) である。(Lc. 17,10)

**Cum feceritis omnia mandata, dicetis:** “*Servi inutiles sumus*”

あなたたちは命じられたことをみな成し遂げたとき 私たちはとるに足りないしもべです”と云うだろう。

- 1) (*Assim também vocês*) **quando tiverem cumprido** tudo o que lhes mandarem fazer, **digam:** ‘Somos empregados inúteis; (fizemos o que devíamos fazer).’
- 2) **quando tiverem feito** tudo o que Deus vos mandou, **digam:**

“Somos simples trabalhadores, (porque ... )

3) **depois de haverdes feito** quanto vos foi ordenado, **dizei**: Somos servos inúteis, (porque ... )

(L.H.) **Depois de fazerem** tudo o que foi mandado, **digam**: “Somos empregados sem valor (porque ... )

4) **cum feceritis** omnia quae praecepta sunt vobis, **dicite**: Servi inutiles sumus, ...

**quando hubiereis hecho** todo lo que se os ordenó, **decid**: “Siervos somos sin provecho; ...

5) **cuando hayáis hecho** todo lo mandado, **decid**: “No somos más que unos pobres criados, ...

6) 自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。...』といいなさい。

ルカ 10,17 においてもポルトガル語各版に大きな差違が見られる。共通点は、主文の動詞が、引用文の未来形を除いて、すべて命令形ということである。

- |        |   |                     |                  |
|--------|---|---------------------|------------------|
| 1) 2)  | 葡 | quando              | + 接続法未来完了        |
| 3)     | 葡 | depois de (前時の前置詞句) | + 人称不定詞完了形       |
| (L.H.) | 葡 | depois de (前時の前置詞句) | + 人称不定詞          |
| 4)     | 希 | ὅτε                 | + 接続法アオリスト       |
|        | 羅 | cum                 | + 直説法先立未来 (未来完了) |
|        | 西 | cuando              | + 接続法未来完了        |
| 5)     | 西 | cuando              | + 接続法現在完了        |

これら近代語との対応から見ると、「ヨハネ福音書」第2章第10節ヴルガタ訳 cum inebriati fuerint の場合とは性質が異なるようである。しかしながら、ギリシア語原典が同じὅτε + 接続法アオリストであること、さらにポルトガル語各版からの対応を考えると問題が残る。すなわちポルトガル語訳3)と(L.H.)の前置詞句訳は、ヨハネ福音書当該箇所では、2)において用いられていた構文である。一方、ルカのこの箇所では quando + 接続法未来完了を用いている。また、多くの版が完了時制で訳出していることも先に検討したヨハネ福音書 2,5 や同 1,33 と異なる点である。

以前試みた次のような図式的対応は果して成立するであろうか。

一回性の出来事として：

希 : ὅτε 接続法 → ? 羅 : 先立未来 → ? 葡 : 接続法未来 → 西 : 接続法未来  
 接続法現在

また原典の接続法が近代語において直説法に変化するため奇異な観があるがヨハネ

2,10 に関して次の図式は可能であろうか。

習慣・繰返される出来事の想定( iterativus )として :<sup>27</sup>

希 : &v 接続法アオリスト → 羅 : 接続法完了? → 葡 : 直説法( 現在 / 完結した状態 )

西 : 直説法( 現在の状態 )

### 第 11 節 所有形容詞と代名詞属格、古典語との構文の差違

( 2,11 )

1 ) Foi assim, em Caná da Galiléia, que Jesus come\_ou seus sinais. Ele manifestou a sua glória, e seus discípulos acreditaram nele.

2 ) Deste modo, em Caná da Galileia, Jesus realizou o seu primeiro milagre. Assim mostrou o seu poder divino e os discípulos acreditaram nele.

3 ) Com este, deu Jesus princípio a seus sinais em Caná da Galiléia; manifestou a sua glória, e os seus discípulos creram nele.

( L.H. ) Assim Jesus começou os seus milagres em Caná da Galiléia. Ele mostrou a sua glória, e os seus discípulos creram nele.

4 )    
 τὴν δόξαν αὐτοῦ

**Hoc fecit initium** signorum Iesus in Cana Galilaeae et manifestavit *gloriam suam*, et crediderunt in eum discipuli eius.

Este que fue el principio de los milagros hizo Jesús en Caná de Galilea, y manifestó su gloria y creyeron en él sus discípulos.

5 ) Así, en Caná de Galilea, comenzó Jesús sus señales, manifestó su gloria y sus discípulos creyeron más en él.

6 ) イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

( 小林訳 ) これをイエスは ( 数多くの ) 徴のはじめとしてガリラヤのカナで行ない、自分の栄光を顕した。そして彼の弟子たちは彼を信じた。

ギリシア語において α ( 代名詞属格形 ) で表現されている所有関係は、全てのポルトガル語訳とスペイン語訳において所有形容詞 seu / su の用法で一貫している。ここでもラテン語 *gloriam suam* 「( 主語 ) 自身の栄光を」の箇所は、再帰的な意味を持つ所有形容詞を用い、この点でギリシア語とは異なっている。

古典語の構文は次の通りである。

(対格・代名詞) + (動詞) + (対格・述語としての名詞句)<sup>28</sup>

この構文をを反映した訳は、上記の中では小林訳のみである。4)のスペイン語訳 *hízolo* の *lo* は人称変化した動詞 *hizo* に先行する関係文 *Este que fue el principio de los milagros* 「これが奇跡のはじめであった」を示す代名詞であり性質が異なる。他のポルトガル語・スペイン語訳では、様態の副詞(句) *assim, deste modo, com este; así* 「このようにして... を始めた(行った)」と表現している。強いて言えば、強調構文の 1) *Foi assim, ....., que...* にある種の原典の反映を見出すのみである。

興味深いことに、ギリシア語において代名詞  $\alphaὐτόν$  が対格のみならず文法性においても後続の  $\alphaὐτήν$  (女性名詞) に一致している。ヴルガタ訳においては、*Hoc* が中性代名詞であり *initium* も中性名詞であるため、*Hoc* 自体が前文の内容を受けているだけなのか、やはり後続の *initium* と格性数において先行して一致を示しているのかは明らかでない。

対応するポルトガル語とスペイン語の動詞 *fazer; hacer* にも類似した用例は見出されるが、人を目的語にした例文のみである。

例：葡 *Fez o Filho médico. 彼は息子を医者にした。*

西 *Le hicieron general a los cuarenta años. 彼は40歳で将軍になった。*<sup>29</sup>

人が目的語であっても、さらに前置詞を伴わない同格の述語あるいは目的格補語を加える用法は、特にスペイン語においては困難なようである。上記のポルトガル語に対応するスペイン語は次の通りである。

*Hizo de su hijo un médico. (= Hizo médico a su hijo.)*<sup>30</sup>

両言語とも *fazer / hacer* の同格補語(あるいは述語)の表現に関しては、目的格の「...を...とする」よりも、むしろ再帰代名詞 *se* を伴った主格補語の用法「...になる」が自然であることから、いずれの版も古典語とは異なった構文に訳出したものと考えられる。(未完)

## 注

- 1 どの部分を挿入句とするかについては、いくつか見解がある。詳しくは、岩隈 p.26, 註9 参照。
- 2 *Novo Aurélio Século XXI* 3.ed. pp.286 ( Bem que の項 ) では、動詞が接続法現在の例文が引用されている。
- 3 岩隈 *ibid.*; *A greek grammar of the New Testament ...*, p.93 (169 (3)) 参照。
- 4 田中・松平『ギリシア語文法』の用語では「現在完了分詞」であるが、主文の未完了過去の動詞との関係、すなわち完了あるいは前時であることを明らかにする意味で、単に「完了分詞」とした。
- 5 Cf. *Novo Aurélio Século XXI* 3. ed. p.1969. ただし、この辞書においては、*todo* の第3義が *Pron.Indef.* の記述であるが、用例は形容詞的である。

- 6 Julio Martínez Almoyna, *Dicionário Editora de Português-Espanhol*, Porto, 1990, p.1227. 白水社『現代ポルトガル語辞典』1996, p.1185の対応する記述は次の通りである。「男 全体, 全部 Eu me refiro ao *todo* e não às partes. 私は全体のことを言っているのであって部分ではない。 複 Aqui *todos* falam japonês. ここにいる人は全員日本語が話せる。」
- 7 Cf. Napoleão Mendes de Almeida, *Gramática Metódica da Língua Portuguesa 39.a ed.*, São Paulo, 1994, pp.192 (349, 350).
- 8 スペイン語の *todo* の用法について日本語で記された文法書で詳細であるのは、高橋正武『スペイン広文典』白水社, 1967, p.212-p.214を参照。比較的新しい解説として、山田善郎・監修『中級スペイン文法』白水社, 1995, pp.213 参照。
- 9 Cf. Jaime Berenguer Amenós, *Gramática Griega 32ed.*, Barcelona, 1984, p.57 (126).
- 10 Napoleão Mendes de Almeida, *Gramática Latina 25.a ed.*, 1994, p.463 (L.101, 505)では、“adjuntos adverbiais (副詞的形容詞)”の項目で *tota Italia* (em *toda a Itália*) の用例で説明されている。
- 11 Cf. Almeida, *Gramática Latina 25.a ed.*, p.416 (447, n.126). 次の文例が用いられている: *totus ager* (農地全体)= *todo o campo* (= *o campo inteiro*); *omnis ager* (あらゆる全ての農地)= *todo o campo* (= *todos os campos*).
- 12 Cf. Real Academia Española, *Diccionario de la Lengua Española 22 ed.*, 2001, Madrid, p.2187. また 5) *Todo el mundo* について、高橋『スペイン広文典』p.213で、「世界中のもの、誰もかれも」と訳し、「《*todo* + 冠詞 + 場所の名詞》は《そこに住む人みんな》の意味にもなる。」と説明している。
- 13 松平・国原『新ラテン文法・第3改訂版』南江堂, 1977, p.34 (97)参照。本書では一般的な属性的 (attributive) 位置として説明している。なお、前項96において、*vir bonus* 「良い男」属性的用法 / *vir bonus est*. 「その男は良い。」述語的用法 (predicative) の区別を説明している。呉『ラテン語入門』p.36 (105): 「形容詞はふつうそのその形容する名詞のあとにつづけて書かれる。」Almeida, *Gramática Latina 25.a ed.*, p.51 (79, 80): “O adjetivo coloca-se ordinariamente depois do substantivo.” Mariano Bassols de Climent, *Sintaxis Latina 2 vols.*, Madrid, 1983, I pp.161 (146): 第9章品質形容詞。語順と用法との関係は明確に示されていないが、属性的用法を *especificativo* (限定的・特定化する) と *descriptivo* (記述的: 『中級スペイン文法』pp.62の非制限的用法に相当) に分類している。
- 14 ジャック・ツルデル監修『ラテン文法』サンパウロ, 1984, p.84 (154) 参照。
- 15 『中級スペイン文法』p.62-p.64参照。同書によると *bueno*, *malo*, *grande* の前置率は80%前後である。ポルトガル語における形容詞の前後置による意味の相違は、*Gramática Metódica da Língua Portuguesa 39.a ed.*, p.487 (808) 参照。
- 16 『中級スペイン文法』pp.62 参照。
- 17 Cf. *Gramática Metódica da Língua Portuguesa 39.a ed.*, p.149 (266, Nota).
- 18 United Bible Societies, *The Greek New Testament 3d. ed.*, 1975 と岩隈訳注では削除。ヴルガタ訳では、Editio Clementina, 1959 では *tunc* あり、Nova Vulgata, 1979 ではなし。
- 19 Cf. *Gramática Griega 32ed.*, p.151 (234II).
- 20 『中級スペイン文法』p.347; pp.183 参照。
- 21 田中・松平『ギリシア語文法』p.181-p.183 (440 口; 435 二) 参照。

- 22 cum で導かれる文の文法的名称を統一するのは困難である。「時間文・従属文」(松平・国原『新ラテン文法・第3改訂版』)、「副文章」松平・田中『ギリシア語文法』、「従属節・副詞節」『中級スペイン文法』など近代語の文法書。「文」ととらえるか「節」ととらえるかも含め、それぞれ相応の理由もあり一長一短である。
- 23 『新ラテン文法・第3改訂版』pp.307 (799) および『ラテン文法』p.78 (146) 参照。
- 24 田中秀央『羅和辞典・増訂新版』研究社, 1966, p.308 では他動詞「inebrio v.a. 2 酔わせる」のみで形容詞の項目はない。一方、S.カンドウ『羅和字典(南雲堂フェニックス1995復刻)』公教神学校, 1934, p.479 では動詞とは別に形容詞 *inebriatus* の項目を設けている。仮に動詞の受動態であったとしたら、接続法完了 *inebriati sint*; 先立未来 *inebriati erunt* となるはずである。
- 25 国原吉之助『中世ラテン語入門』南江堂, 1975, p.116 (148), p.121 (151.9) 参照。
- 26 『ラテン文法』p.79 (147) 参照。
- 27 用語は田中・松平『ギリシア語文法』p.181 (435) を使用。
- 28 岩隈 p.27: 註 11; *A greek grammar of the New Testament ...*, p.152 (292) 参照。
- 29 例文は『現代ポルトガル語辞典』白水社, 1996, p.529; 『新スペイン語辞典』研究社, 1992 による。ポルトガル語の用例は *Novo Aurélio Século XXI 3.ed.* p.886 “Transobj. 43. Converter em; tornar:” の項目を参考にしたようである。
- 30 用例は『現代スペイン語辞典・改訂版』白水社, 1999, p.677 による。

